

8月末から始まった東京電力の原発事故隠し発覚事件は、底なし沼のように深く暗く、中部電力と東北電など他の電力会社にまで広がり、事故隠しが日本の電力会社の体質に深く関わるものであることをさらけ出した。政府と電力会社、原子力産業からなる原子力社会の腐敗と怠惰、安全意識の麻痺は、老朽化原発の危険性をさらに高める。チェルノブイリの再来を招かないうちに一刻も早く原発時代を終わらせよう。

傷だらけの原発を長期間運転

東京電力の事故隠しは当初、福島第一、第二、新潟県柏崎刈羽原発の合計13基で29件と発表されたが、調査がほぼ終わったかに見えた9月20日に新たに8件の事故隠しが発覚し、合計37件になった。同時に中部電力の浜岡1号、3号原発と、東北電力の女川原発でも配管の傷の無届修理と、放置したままの長期運転が明らかになった（両方で19箇所）。隠された傷の多くは、原発の安全確保に深く関わる部分ばかりである。

整理すると（1）炉心シュラウド（隔壁）：これは燃料棒と制御棒を含む炉心の周りを覆い、沸騰水の流れをスムーズにするもので、直径約6m、厚さ4cmのステンレスの筒である。この筒は一個100億円という。太さの違う筒を3段溶接するため、溶接部の劣化によるひび割れが、ほぼ全周に伸びていた。（2）蒸気乾燥機：沸騰した蒸気から水滴を除き、タービンに流すため装置で、圧力容器の上部にあり、多数の小部屋からなる。

（3）再循環ポンプ配管：圧力容器内の沸騰水を高速で循環させ、蒸気の泡を追い出し、核分裂の速度を調節するポンプの配管。浜岡1、3号と女川1号で見つかったら、東京電力でも3原発8件の傷隠しが新たに露見した。（4）制御棒駆動機構の水圧配管：通常時は核分裂を制御し、事故時には緊急停止に使う装置の配管。（5）中性子

測定器案内管：炉心の核分裂の度合いをモニターし、制御のための情報を収集する測定器が入っている配管。どれをとっても、少しぐらいなら傷があってもかまわない、という機器ではない。問題のほとんどは劣化によるひび割れである。

我々と常識が違う原子力村社会

150気圧もの水圧がかかるステンレス配管の傷の深さが5ミリ、長さが10センチ以上あっても、「傷ではなく傷の兆候」だという電力会社の（非）常識が事故隠しの原因である。政府は今度の騒ぎを機会に、この程度の傷はそのままに運転を認める「維持基準」策定をめざすという。厳しい基準を守るのではなく、現実基準をあわせる本末転倒、これも規制緩和の一環だろうか。

アメリカの内部告発がなかったら

今度の事故隠し発覚は2年前のアメリカのGE社の下請け企業社員の内部告発が発端である。国はそれを2年も放置し、GE本社からの催促でやっと重い腰をあげた。電力会社と国は同罪である。内部告発がなかったら、傷だらけの原発の運転が今でも継続していたはずである。そうした状態で東海地震があったら、と思うとぞっとする。地震の力は「応力集中」によって、傷を一挙に広げ、配管破断と炉心溶融の地獄図がもたらされるはずである。 （河田）